

玄州会・市民病院交流研究発表会
プログラム・抄録集

H27年2月5日（木）
壱岐文化ホール（中ホール）

特定医療法人玄州会・壱岐市民病院

玄州会・市民病院交流研究発表会 プログラム

17:30 受付

18:00 開会

18:10~19:00 第1部 市民病院「より良いケアを目指して」

座長 横山 純子 (光武病院 外来健診主任)

松永 比登美 (光武病院 看護師)

1. 整形外科病棟における入院患者の転倒・転落の実態調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・
～インシデントレポートを分析して～

2階急性期病棟 看護師 吉井美喜子

2. 療養病棟における口腔ケア方法と効果の考察～心地よさ度を評価して～・・・・・・・・

4階療養病棟 看護師 牧山 章子

3. GAM (誤嚥予防アンドマウスケアチーム) 活動を通じて見えてきた課題・・・・・・・・

外来看護師長 安川 優子

4. 退院支援看護師の現状と課題～地域包括ケア病棟での関わり～・・・・・・・・

地域医療連携室 退院支援看護師 佐藤セイ子

19:00~19:40 第2部 玄州会「メンタルケア」

座長 松本 直子 (壱岐市民病院 看護副部長)

清水 民江 (壱岐市民病院 看護師長)

1. 高齢者の心理 (こころ)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

光武病院 療養病棟 看護師 山内加代子

2. 神経難病患者の思い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

光武病院 療養病棟 看護師 東谷弘美

3. その人らしくある為に私たちにできること事・・・・・・・・・・・・・・・・

グループホーム みのり 主任 富永ゆかり

19:40 総評

19:50 閉会

研究テーマ：整形外科病棟における入院患者の転倒・転落の実態調査

—インシデントレポートを分析して—

所属施設：岐阜市民病院 2階病棟

研究者名：○吉井 美喜子 大桑 美智子 山本 明菜

【目的】平成24・25年度のインシデントレポートを分析することで、整形外科病棟における転倒・転落の要因・今後の課題を明らかにする。

【方法】1 期間 平成26年5月～8月

2 対象 整形外科病棟入院中に転倒・転落を起こした患者

平成24年4月～平成26年3月 55名

(インシデントレポート77件)

3 方法 転倒・転落発生後に記載したインシデントレポートにより、事故発生時の概要、対策を調査する。内容は、発生日時・場所・年齢・疾患・認知症(HDS-R)・薬剤の有無・転倒・転落アセスメントスコアシート・事故発生後の改善策について統計をとる。

【結果】1) 患者の概要：転倒・転落患者の年齢は80代28名(51%)、90代13名(24%)であった。疾患別でみると大腿骨骨折(頸部・転子部・頸基部)が32名(58%)で最も多かった。大腿骨骨折患者では、術後2週目に11件の転倒が発生していた。入院時の転倒・転落アセスメントスコアシートでは危険度Ⅱ以上42名(76%)であった。患者の心身状況をみると睡眠・安定剤を内服していた患者が32名(60%)であった。「認知症」に関して改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDR-S)で評価した結果、不明18名(33%)、5～10点14名(25%)、20～30点7名(13%)であった。

2) 転倒・転落の状況：転倒・転落の発生時間は夜間帯(17～8時)が58件(75%)と多かった。時間別にみると、5時・6時・7時・20時・21時台に多く発生していた。発生場所では病室が64(83%)件と最も多かった。環境要因での転倒・転落が19件(14%)あり、「床・器具の水濡れ」が3件、「センサーマットの電源確認不足・設置場所の不一致」が3件あった。

3) 転倒・転落後の看護師の対策：事故発生後の改善策では、「頻回訪室・観察強化」が23件、「ナースコール指導」が21件、「センサーマットの工夫」が17件であった。

【結論】

1 整形外科病棟では70歳以上で大腿骨骨折患者の術後の転倒・転落が多かった。

2 大腿骨骨折術後2週目の認知症患者の転倒・転落が最も多く、術後早期に転倒予防策の充実が必要である。

3 病室での転倒・転落が8割を占め、病室の環境整備と患者のパターンを考慮した転倒予防策が重要である。

研究テーマ：療養病棟における口腔ケア方法と効果の考察
～心地よさ度を評価して～

所属施設名：老岐市民病院 療養病棟

研究者名：○牧山章子 安川朋美 小林久美子 目良由美子 久田琴絵

【目的】 口腔ケア前後の心地よさを評価し効果的な口腔ケアにつなげる

- 【方法】
- 1 期間 平成26年7月～8月
 - 2 対象 口腔ケア用品3種①吸引付ブラシ②モアブラシ③重曹ガーゼ+ウェットキープングをそれぞれ主に使用している事例
 - 3 方法 ①ケアプランの表記・統一
②心地よいケアにつながるポイントの確認・検討
③心地よい状態・悪い状態を表す項目をケア前後でチェックし点数化することで心地よさ度を把握する
④上記②③を元にケア方法の改善を行う

【結果】 ケア前よりケア後の心地よさ度はわずかではあるが上回っていた。しかし、ケア方法を改善した後ではケア後の心地よさ度の上昇は得られなかった

- 【結論】
- 1 口腔ケアは心地よさをもたらすケア
 - 2 効果的な口腔ケアを行うためには、
①ケア手順の統一が必要
②口腔アセスメントだけでなく非言語的表現にも注目することが必要
 - 3 ケアでは、快な刺激が不快な刺激を上回ることによって心地よさを感じることができる

テーマ：GAM（口腔ケア&誤嚥防止チーム）活動を通じて見えてきた課題

所属施設名：苓岐市民病院 誤嚥予防&口腔ケアチーム（以下GAM）

発表者：安川 優子（看護師） 久保田 誠司（言語聴覚士）

【目的】GAMの活動を振り返り、課題を明らかにする事で更なる口腔ケアの質の向上・活動の修正に繋げていく。

【期間・対象】 1 期間 平成26年7月～平成27年1月
2 対象 病棟スタッフ

【報告内容】 1 活動内容紹介
2 活動実績
3 ラウンドの効果

【課題】 1 活動を通じての課題
2 考えられる解決策

テーマ : 退院支援看護師の現状と課題
地域包括ケア病棟に関わって
所属施設 : 豊岐市民病院 地域医療連携室
研究者名 : (発表者) 佐藤セイ子

【目的】平成26年10月より新設された「地域包括ケア病棟」で主として退院支援に関わり、退院支援の現状を把握し、現時点での課題を報告する。

【期間・対象】 1 期間 平成26年10月～平成26年12月
2 対象 退院支援を行った患者68名

【内容】 1. 急性期病棟入院時の関わり
2. 地域包括ケア病棟に転棟後の関わり
3. 事例報告

【課題】 1. 患者家族に対して
2. 病院として取り組むこと
3. 地域・社会との連携

研究テーマ：高齢者の心理（こころ）について

所属施設名：玄州会光武内科循環器科病院

発表者名：山内 加代子

【はじめに】今、私の働く療養病棟は、平均年齢81歳です。

療養病棟に入院中のA氏は、頻回にナースコールをしています。

そこで、私は患者理解のために、高齢者のこころを知ることが必要だと感じ、勉強することにしました。その内容をまとめたものを報告します。

【高齢者に共通していること】

- a 衰退・喪失を経験する年代
- b 長い人生の歴史をもつ
- c 衰退の方向性と成熟の方向性を併せもつ
- d 死に近い存在

【高齢者の問題となる精神症状】

- ・不安状態
- ・うつ状態

【高齢者の心理への対応】

高齢者は、それぞれ積み重ねてきた人生経験により、その心理は様々であり、対応はひとつの型にあてはめられないと言える。

私達、医療従事者は高齢者のこころを安易に「理解できた」と思い込んだり、「理解できない」と諦めてしまうのではなく、高齢者のこころに寄り添い、高齢者のこころを理解する努力を続けることが大切であることを学んだ。

研究テーマ：神経難病患者の思い

所属施設名：玄州会光武内科循環器科病院

研究者名：○東谷弘美 山内加代子 横山純子

【目的】 神経難病患者の思いを知り看護に役立てたい。

【方法】 1、神経難病患者の家族へのインタビュー

2、今後どうなっていくかの不安・生きる上での支えについて語った内容を看護記録、リハビリ録から抽出

【結果】 1、カテゴリー化した内容

病気に気づいた頃から現在に至るまでのことを、自然な流れに沿って対話し、99 のラベルをつけた。それらを次の9つのカテゴリーに分類し、「①告知までの病気の経緯、②病名告知と家族の思い、③わからない患者の深層心理、④わかろうとする娘の思い、⑤今後どうなっていくかの不安、⑥生きる上での支え、⑦日々大切に生きる、⑧まわりのサポート、⑨理解されない辛さ」と名称をつけた。

2、(1) 今後どうなっていくかの不安では、確定診断2ヵ月目には唾液がのどに溜まる、食べ物が飲み込みにくい、と不安を抱えており、確定診断5ヶ月目よりしゃべりにくい痰がつまりそうと訴えた。

(2) 生きる上での支えでは、家族の面会と外出、リハビリを頑張る、過ごしやすい環境などが挙げられた。

【結論】 神経難病患者は今後どうなっていくかの不安を抱えながら生きる上での支えを糧に、日々大切に生きていることが明らかとなった。これらの結果から、神経難病患者の看護において、今できること、患者の望む生き方を支援していくことが重要であり、それが患者の生きる支えとなることが明らかとなった。また、患者の深層心理については、今後の課題となる。

研究テーマ：その人らしくある為に私たちにできる事

所属施設名：玄州会 グループホーム みのり

研究者名：富永ゆかり

【目的】グループホームは医療関係施設と異なり、認知症患者の行動を拘束や薬物などで抑制せず、患者を積極的に日常生活に参加して貰うと同時に個人の自由を尊重する。今回、当施設に入所した一人の認知症患者変化について報告する。

【症例】高齢女性、骨折術後認知症状が悪化し、暴行、暴言、不穏、せん妄などで、継続療養が困難なため入所。

対応・対策：薬物や拘束などの手段を使用せず、彼女の生活ペースに合わせて、寄り添い、尊厳あるケアを原則に計画を立てた。

【結果】入居前は、食事一部介助、排泄オムツ、眠剤使用、移動車椅子であった。入居後は、食事自力摂取、排泄自立パンツ+パット、眠剤中止移動自立歩行となる。みのり入居1.5年を経過、歌を歌ったり家事を手伝ったり毎日穏やかに生活でき骨折前の状態に戻っている。

【結論】尊厳を守るケアを基本とし、リスク面を考慮し、その人が持っている能力を最大限活かせるように援助することが重要だと考える。